

## クリシュナムルティにおける生の根源的変容について

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター

世界は、現在、傷つけあいの絶えない状況にある。人は争いや競争の中で、自己を守ることに必死となり、周囲の人々を傷つけている。そして自分もまた傷つけられてもいる。このような状況では、互いが安全に生きることにはできない。このような状況を打破し、全ての人があるがままの存在を肯定されて生きることにはできないだろうか。本論文では、クリシュナムルティによりながら、その可能性を考察する。

第1章では、この世界を生き抜くために努力を重ねる人間の姿を見てゆく。私たちは、自己を高める努力、平和を求める努力を続けている。しかし努力は、理想との同一化や、あるがままの状態からの逃避へと陥る。努力において、人は自分自身のあるがままを否定するのである。それは「あるがままの自己からあるべき自己へ」という戦いを自らに強いることである。このように努力とは、あるがままを否定し、心に争いを生むものである。そうした努力を生み出すのは、他ならぬ人間の心(mind)の働きである。心は、過去に条件づけられた思考で成り立っている。思考はイメージを作りだし、あるがままの状態との不一致を引き起こす。また思考はカテゴリー化を促進し、自他の分離を生みだし、戦いを生む。このように思考は、内的にも外的にも絶えることのない争いしかもたらさない。その努力を終わらせるには、努力をもたらず根本である心の構造自体への気づきが不可欠である。そこで、能動的に努力することから、受動的にあるがままの思考を観察することへと、指向性の転換が起こる。この観察によって自己の心への洞察を持つことは、自らの心だけでなく全体性への気づきをもたらずのものである。

第2章では、その全体性への気づきについて論じる。まず世界と人間との関係を見てゆく。世界と人間は不可分な関係にあり、相互に影響を与え合うものである。世界を作り出すのは人間の心である。人間の心が争いに満ちている以上、世界も争いに溢れたものになる。その世界を生きる人間は、世界の混乱の中で、同じように苦しみ、悲しむことになる。他者と私は切り離された存在ではなく、同じ悲しみを背負うのである。そのことに気づくことで、共感が生まれる。そして自己が世界と不可分であることを理解することによって、自らの心の変革が世界を変革することにつながることに気づかされる。そのような変革によって、すべての人や自然があるがままに安全に存在できる可能性が開けるのである。

また第2章では、同じく全体性への気づきについて述べているティク・ナット・ハンを取り上げる。人も自然もすべては、切り離せるものではなく、相互に存在しているのである。他者や自然が存在しなければ、ひとりの人は存在することはできない。他者の痛みや悲しみは、私の痛みや悲しみでもある。人と人、人と自然とのつながりに気づき、そこにある悲しみを一体となって受け止める。それが、全体性における自他の区別のない愛である。

全体性の自覚は、自己を観察することによって生じ、確かなものとなる。第3章では、

最初にその自己観察のあり方を見てゆく。あるがままの自己の観察には、あるがままにとどまる態度が必要である。だがその態度を人は持ち合わせておらず、あるがままの思考に対して、高次の思考者を作りあげ、常に思考を監視し、批判している。だが、その思考者も思考に他ならず、実際は一つの思考の動きしかないのである。思考の過程を、思考者を作りあげることなく観察することが、あるがままの観察である。その観察において、あるがままの状態は超越され、思考は止む。

自然や人の本来のあるがままの姿、その中にある美しさを感じられるのは、そのような思考のない状態においてである。そこでの気づきは、対象との間に思考の作りだす距離のない、直接の気づきであり、これが愛である。この愛は、慈悲に支えられたものである。慈悲は、人類全体が抱える、思考の生み出してきた普遍的な悲しみに気づくとき生まれる。人類全体に対する深い共感が起こるのである。慈悲の地平において、深い共感をもとに、あるがままにすべての人は肯定される。慈悲における行為は、全体性の共感にもとづくものである。そのような行為を導くのは叡智である。叡智は思考を介在させることなく、適切な行為を生み出してゆく。

この慈悲の地平を支えているものがある。無の地平である。これは心によって操作できない地平である。無には何も無いがゆえに、全てが新しく始まる。人間の自己中心性に支配されないものが創造されるのである。この無には完全な安定や安心がある。無は、人を根底から支える力を持っている。無に根づくことで、人は慈悲や叡智をもって現実を生きてゆくことができるのである。そのように人が生きるならば、人と人との関係性は変化し、世界も変革されうる。

慈悲の地平も、無の地平も、人間の思考を超えたものである。私たちが、それを得ようとしても得ることはできない。人にできることは、思考の限界に気づき、受動的に自己を観察することのみである。